Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法――

日蓮宗壽仙院住職
崎津寛光さん

第44回

戦没者の慰霊供養に命の儚さ、大切さを感じて

さきつ・かんこう　1972年生まれ、東京都出身。高校卒業後、アメリカの大学へ4年間留学。帰国後、立正大学仏教学部に編入し仏教を学ぶ。卒業後は商社に就職。6年間の勤務後、日蓮宗の僧籍を取得し、30歳のときに壽仙院副住職に。2011年より住職となる。2008年よりソロモン諸島での戦没者の慰霊供養と遺骨収容を始める。現在は「全国ソロモン会」常任理事も務める。

私は6年前からソロモン諸島、主にガダルカナル島を中心に、太平洋戦争の戦没者の慰霊供養と遺骨収容を行っています。

この活動を始めたきっかけは、アメリカに留学していた大学時代に見たドキュメント映像。ガダルカナル島での日米の激戦を知り、私は衝撃を受けました。戦争によって海外で亡くなった日本人はおよそ240万人、そのうち今なおご遺骨が還ってきていない方は約113万人と言われています。そのご遺骨を日本に還してあげたい、また現地で私にできる慰霊供養をしたい……そんな思いから、活動を続けてきました。

6年前、私は一人で初めてガダルカナル島へ行きました。慰霊を行いながらの滞在の最終日、現地在住のオーストラリア人から偶然「お骨がある」と言われました。段ボールに入った生々しいご遺骨。私はそのご遺骨を譲り受けました。

現地に赴く前、私は「全国ソロモン会」というソロモン諸島から帰還した方々の戦友会に加えていただいていましたので、帰国後にご遺骨の収容を報告。彼らからすれば戦友の帰還です。「まだ帰ってきていない友を迎えに行く」という強い思い。それ以降は戦友会やご遺族の方々とガダルカナルへご一緒することとなりました。

戦後約70年を経てなおジャングル奥地に眠る遺骨

現地ではジャングルの奥地での捜索となります。夜は漆黒の闇。地元の人でも足を踏み入れないような場所です。そこで野営しながら、無理なく安全に捜索しなければなりません。戦友会の方々はみなさん高齢ですから、活動には限界があります。若手の力を借りなければとボランティアを募り、この3年間では90人ほどの有志と活動を共にすることができました。

最南端の戦地、ガダルカナル島での慰霊供養。遺骨の捜索では現地の村のガイドたちの協力を得て、ジャングルの奥地まで踏み込みます。

昨年はジャングルで36柱のご遺骨を収容しました。その場所は非常に生々しく、「ここに約70年前、日本人がいたのだ」という現実に直面させられます。ジャングルでご遺骨を発見し、その場で読経すると、必ずといっていいほど涙雨が降ります。また、ご遺骨を収容すると紫の蝶々が肩にとまる……これらは一度ならず、二度三度と経験した不思議な出来事。亡き魂が少なからず喜んでくださっているのだと思っています。

供養を待ちわびる魂のために慰霊を続けていきたい

この活動で教えられるのは命の儚さと大切さです。今の日本で暮らしている私たちは国に守られ、何の不自由もありません。でも戦争中はそんな当たり前がなかった時代。前線に送られた何百万人の命と思いが存在します。現地で供養もされず残されている方々の魂を生かすのは、残った我々の使命。供養を待ちわびている方々のためにも、これからも慰霊供養と遺骨収容を続けたいと思っています。

撮影／広瀬壮太郎　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻